

幼稚園におけるのぞましい活動

お茶の水女子大学附属幼稚園

大切な自由あそび

堀 合 文 子

幼児の生活は、大人の課業の生活に対して「あそび」の生活である。その「あそび」の生活の中で、幼児の経験を豊かにし、個性のばそうと子どもは考え、その指導をいかにすべきかを日常工夫している。

○幼児の生活の中で自由あそびのしめる位置

私どもが計画をたてる時、文字にあらわすものはみな経験の羅列にすぎない。大人は幼児が経験することを考えるのに苦勞し、経験させることによって大人は教育したと満足している。

「自由あそび」もちろん、その中の経験であり、教師の計画で

あるが、ともすると、それはあそんでいるので教育の場とちがうようにとられてしまう。が、むしろこれはほかのものより以上スペースをとらなければならぬ大計画、大経験であり、これなくして幼児教育は成り立たないといっても過言ではないであろう。学校のあそび時間とは全くことなる存在である。

○自由あそびの指導

朝、「おはようございます」と飛びこんでくるその時から、教育は始まり、自由あそびは始まっている。そして「さようなら」と帰るまでそれは続き、教師はその中に一日の計画を折り込んでいく。教師の計画を遂行するのはまあやさしいし、経験が重なれば自然とじょうずにもなるであろうが、一番大切な自由あそびの指導は経験を「つめばつむほどむずかしく、自由あそびの大切さをよく知りながら放任に近い状態においてしまう。この頃はよく友だちとあそべるようになった」と言って教師は園庭をぶらぶら監督するかのようを目を光らせて歩いている。たとえ五歳児になろうと小学生になろうと、あそべるようになろうと、こうなればなるほど自由あそびはその内容も豊かになり大切になってくる。したがってその時の教師の

位置は次第にむずかしくなってくる。

・入園当初は三歳、四歳児に別なく、遊具を活用して、友だち関係を一日も早くつくるように、教師は幼児とともにあそび「あそび」を誘導したり助言したりする。

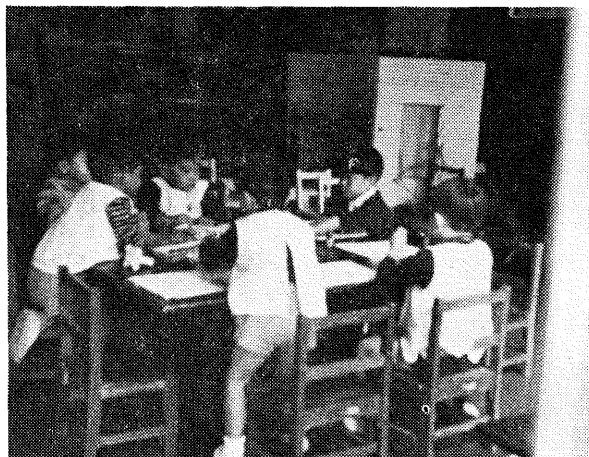
・次第に友だちとの「あそび」が活発になってくると、教師はむしろ友だち間の結びつきをそっとくずさないように見守って、その「あそび」を邪魔しないように環境を整える。

・友だちとの「あそび」が活発になると、その人たちは教師の媒介を必要としなくなるが、中にはその仲間に入り切れないでボツンとしてしまう幼児ができてしまう。この幼児を今度は対象として教師は働きかけ、教師がともにあそぶことによって、友だちの中へ次第にその幼児たちを入れていく。

・教師は忙しい。友だち間の「あそび」が活発になれば、もうあそんでやらなくてよいのでなくて、むしろこれから自由あそびの指導の行なわれる大切な時期に入るわけで、またむずかしい。

幼児はそれぞれの好む「あそび」を登園と同時に開始する。それはさまざまである。砂場あそび、積木あそび、ごっこあそび、ブランコ、すべり台あそび、作ってあそぶ、創作あそびなどなど。そのさまざまの「あそび」をただ目で監督して歩くのではなく、それぞれの「あそび」が、現在の「あそび」より次の機会に一步前進した「あそび」に伸張していくように指導がいるわけである。しかしその指導は、こうなさい、ああなさいと指示するのではなく、幼児のあそ

かいたりつくったりものしいあそび



ても、教師は折をみてはともにあそび、その自由あそびの中で指導をする。

・教師がともにあそぶことは、誰でもできる。しかしそのあそび方が問題で、それが指導となって大きな影響をすべての点に及ぼす。

教師があそびを提供したり、誘導したりする教師中心のあそびと、教師が幼児と同年齢の気持ちになって、幼児の友だちになってあそぶのとある。もちろんこれは年齢と、幼児の「あそび」の経過と発達

びをこわさないように教師が仲間に入り、無言の中に、いや幼児の友だちとなってあそぶその時に、にじみだす指導が必要である。したがって五歳児になって、充分子どもたちの「あそび」が盛んになっ

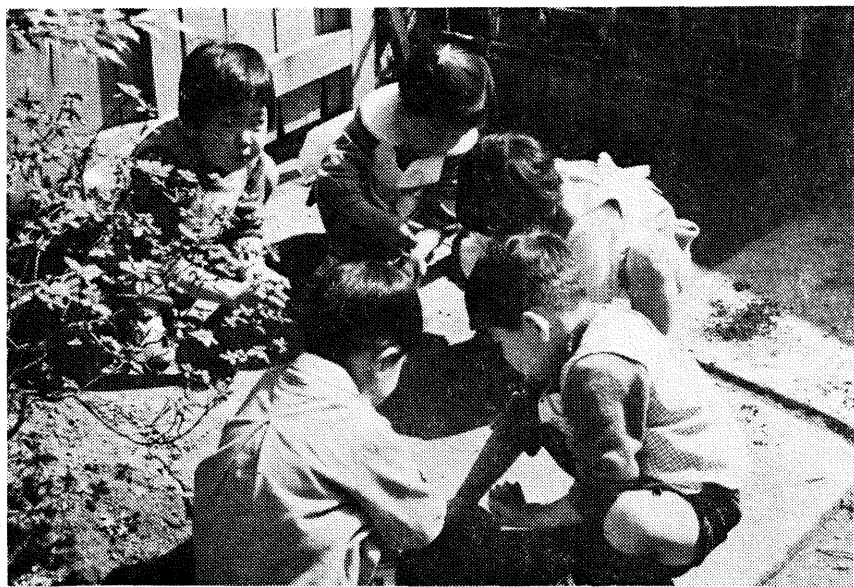
を観察しながら教師自ら指導方針をかえていかなければならない。

・教師がともにあそぶことによって、幼児たちの「あそび」がこわれてしまっていない。

教師が「あそび」に入ったことにより、幼児が自分たちのあそびをやめてみんな、教師のあそびについてきてしまう。これは教師がよくあそんであげてよい指導のようにみえるが、これはのそましくはない。教師がみな大事な、自発的な「あそび」をこわして歩いているので、せっかく、そこには自発性があり、創造性があるのに、みな教師の行動によってこわされてしまうわけである。友だち間の「あそび」を大いに活発にさせながら、その中で指導するという、この点の指導がむずかしく、言葉でいいつくせないところである。

○ある一日（日誌抜粋―三歳児）

今日は朝から大変お天気もよく暖かい。子どもたちも最近めっきりとグループであそぶ楽しさを味わってきたらしく、朝登園するとすぐ友だちに声をかけて、互いにあそびを相談したり、提供したりする。今日も相談がまとまったらしく三、四人のグループは砂場へかけこむ。「先生、手まくって、先生、水使ってもいい」わかりきったことをいちいち聞くが、またこれが親しみの一つ、愛情の表現の一つでかわいい。先生への安定感への反応をまつような言葉にも聞こえる。その間、次つぎと登園。まだ朝の一時は何するとなくふらふらする子もいる。「今日もいいお天気ね、何でもすきなこととしてあ



固い固いおだんごづくり

そびましようね”と私は独言のように声大きくて言う。私の声に力を得てか、あそびにとりつきにくい子も、私の視野からいつの間にか消え、”あら”と思う中に友だちのグループに入っている。私も思わずにっこりしてしまう。ずい分大きくなったなあ、と一年たとうとする今日この頃つくづくと思う。朝、不安そうな顔して登園してきたり、影法師のように私にくっついていたり、ちょっと私の姿がみえなくなると泣声をだして探しまわったなどのことも、もう一年位前のことになってしまった。窓ごしに砂場をみると、数か月続いている固い固いおだんご作りを、あっちの砂、こっちの泥、ライン引きの粉、と蟻のようにこっちへ走り、あっちへ走り夢中になっている。部屋の中では二、三人が積木で高速道路と自動車車庫を造っている。私は道路からはずれている自動車をブーといいながらビルのような車庫へ入れる。”こっちの道を使ってもいいですよ””そうですかブー”教師ということを意識してか、しないのか、この大きい体はもう意識の中ではないらしい。大きい友だちと思っただけかしら。先生、ここ穴あけて”空箱をあっちこっちつなげて何か作っている。穴をあけてあげる。”写真機つくるの””いい形ね””ここにシャッターをつけるとほんとうのようね”

砂場へいく。〇〇さんは山をいっしょうけんめい作っている。私はだまって山のために砂をはこぶ。先生みて、固くなったでしょ”さわってみる。”わあ、とても固い”うれしそうにまたおだんごを持って走っていく。私は黙々と山に砂を運ぶ。みんながよく友だちと



先生もそっと砂場のてつだい

あそびようになると、そのあそびをこわさないようにそっと仲間に入る。そしてまたこわさないようにそっとぬけて他のグループへ。言葉ではこれだけだが何年やってもこれは大変むずかしい。幼児の友だちになったり指導者になったり、母親になったり、兄弟になったり七面鳥のように自分を変えなければならない。忙しい、忙しい。

○理想の指導

自由あそびがスムーズにすべりだして、年齢に適切な経験をその中に折り込んでいくのだが、四歳・五歳になると望ましい経験の範囲が広がってくる。経験によつては集団の方がよりその経験の効果のでもものもある。(音楽リズム・言語) 広くいえば六つの経験も幼児にとつては「あそび」であるから、ベルをならしたり、声をかけて集めてから「さあやしましょう」と始めるのでなく、幼児の「あそび」の中から機会をとらえて、また、教師が機会を「あそび」の中につくつて、興味のあるものから誘導していく。

例一 (1)まりつきをしている。(2)そつとレコードをかけてあげる。(3)やりたい人は参加する。(4)まりなしで音楽にあわせて自由に表現してみる。(5)部屋を広げてちがう表現もする。(6)次第にグループが大きくなる。(7)みにくる人にも声をかけてさそう。(8)夢中になつて、砂場で楽しんで全身の活動をしている人はむりにさそわない。また次の機会にささえばよい。この時はその幼児にとつては砂場の経験の方がより貴重である。(9)次に教師の計画の方に誘導していく。

例二 (1)絵本をよむ。(2)その絵本からこんどは先生の話を聞かせる。(3)その時の話の技術は興味のあるようにうまく表現し、他の幼児も勧誘するほどの技術が必要とする。(4)次第にみんなあつまり、楽しく話を聞く。

金魚は金魚鉢の水の中でこそ金魚の金魚たる生態を充分に発揮できるのだ。

幼児も「あそび」の中においてこそ幼児の幼児たる全活動能力を発揮し、幼児なりの経験を深めていく。幼児期の経験は一応六つの経験にしばられているが、その経験も「あそび」の生活の中において経験する時こそ、本当の経験として幼児の中に生きてくる。そしてその経験は将来学校生活へ入った時、よき基礎、よき経験として発達していく。相手が幼児だけに教師がどんな指導法をとつてもついてきてくれるが、これがこわい。優秀なものだけのびればよいのではない。組全体、力のよわいものもその子なりにその力を充分にのばすのが教育であり、私どもの仕事だ。

あたりまえの教育論だが、幼児期になすべきことは何か、幼児は自由あそびの中でこそ、自分たちの生活を楽しむとともに、あそびの中でこそ、充分に自分の力を発揮し練りみがいているのだ、そして将来の自分の基礎をつくっているのだということを、もう一度よく考え、幼児期に必要な「あそび」の生活をより大切にし、よき指導法を考えたいものである。